

## 感謝の謝罪表現「すみません」

—「すみません」が感謝と謝罪の両方の意味を持つわけ—

山本 もと子

キーワード：感謝、謝罪、丁寧さのストラテジー、自責の念、社会的相互行為

### 要旨

「感謝」と「謝罪」という異なった言語行動が日本語では両方とも「すみません」で表現できるという事象を、Brown and Levinson (1987) が「感謝」と「謝罪」を Face Threatening Act=FTA として同じカテゴリーに分類していることを切り口に「丁寧さのストラテジー」によって説明する。そして、日本語学習者用テキストやドラマのシナリオから感謝の意味を持つ「すみません」と「ありがとう」との使い分けを分析し、特に日本語では話し手と聞き手の相対的力関係や社会的規範がこれらの言語行動の違いに強く影響していることを言及する。また、アンケートの結果から、近年では感謝の気持ちを表すのに「すみません」より誤解の少ない「ありがとう」を用いる者が多いことが明らかになった。

### 1. はじめに

日本語に限らず、外国語を学習するにあたって、最初に覚えておきたいことばのひとつは挨拶である。海外旅行に行った際、たとえ長い文章で話せなくても「こんにちは」や「ありがとう」がその国のことばで話せると、現地の人とのやり取りも温かいものになるであろう。日本語学習者にとっても、挨拶は最初に覚えることばである。「おはよう」や「さようなら」に加えて、「ありがとう」や「すみません」なども日常生活に必要なことばなので、学習者用教科書でもこれらの表現は始めの方に見られる。例えば、研修コースで用いている『みんなの日本語 I』では「ありがとう」が第2課に、「すみません」が第3課に現れる。

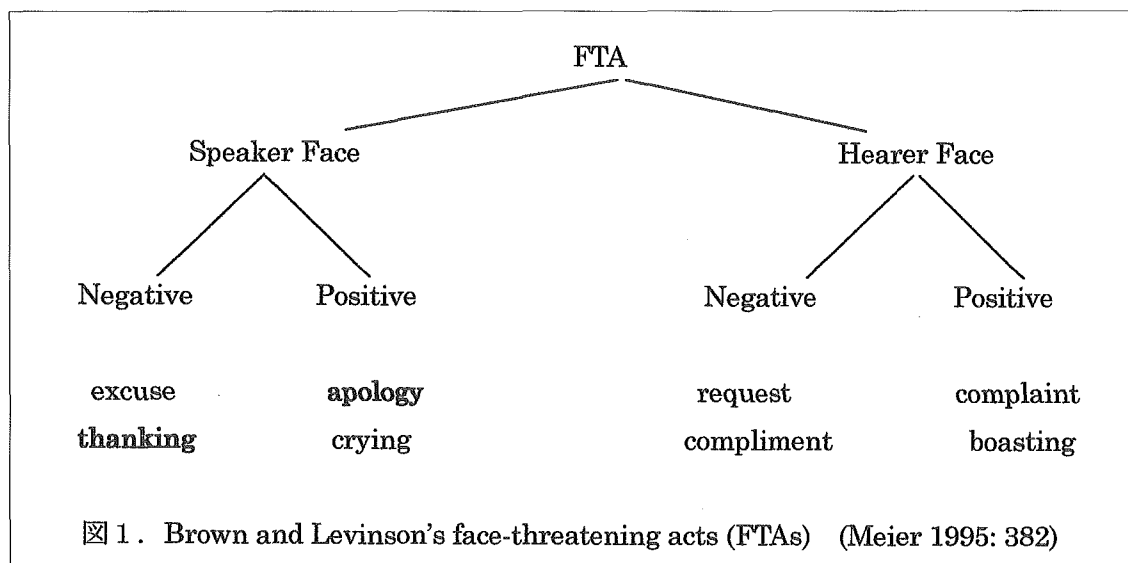
感謝表現「ありがとう」や謝罪表現「ごめんなさい」の使用が誤用されることは少ないが、感謝と謝罪の両方の意味を持つ「すみません」に関しては、初めて日本語を耳にする学習者にとっては理解しがたく、以前から日本語教育を含め様々な分野で研究され続けている。

そこで、本論では Brown and Levinson (1987) が「感謝」と「謝罪」を聞き手のフェイスを脅かす行為（以下、Face Threatening Act=FTA）として同じカテゴリーに分類していることから、「感謝」と「謝罪」の両方の意味を持つ「すみません」は話し手と聞

き手の心理的距離や社会的距離によって影響される「丁寧さのストラテジー」のひとつであるということを証明する。次に、先行研究を参考に日本語教育における感謝を意味する「すみません」の位置付けを確認した上で、ドラマの台本から感謝の意味を持つ「すみません」を含む会話を抜き出し、話し手と聞き手の相対的力関係、感謝の対象、話し手の心理状態など考慮しながら、どのようなシチュエーションで話されているかを分析する。そして、感謝を意味する「ありがとう」と「すみません」の使用範囲の違いを明確にすると共に、これらを使い分ける理由を社会言語学的な観点から考察する。最後に、日本語学習者用テキストの中で感謝の意味を持つ「すみません」が含まれている会話を用いて、実際にその場面で日本人がどのような感謝表現を使うか調査したところ、「ありがとう（ございます）」が圧倒的に多かったことから、テキストと自然な会話とではギャップがあることが判明した。

## 2. 丁寧さのストラテジー

Brown and Levinson (1987) は話し手と聞き手はネガティブ・フェイス（他人に邪魔されないで自由に行動したいという願望）とポジティブ・フェイス（自分の願望が他人にとっても望ましいものであってほしいという願望）の両方を持ち、お互いの感情を考慮しながら会話を進めていると主張している。図1から分かるように、感謝は話し手のネガティブ・フェイスを脅かし、依頼は聞き手のネガティブ・フェイスを脅かす行為である。一方、謝罪は話し手のポジティブ・フェイスを脅かし、自慢は聞き手のポジティブ・フェイスを脅かす行為である。つまり、ネガティブ・フェイスを脅かす行為とは話し手や聞き手の心の負担になるもので、ポジティブ・フェイスを脅かす行為とは相手から理解されたい、好かれたいという気持ちを妨げるものである。



しかし、会話とは一人でする行為ではなく社会的相互行為であるので、ひとつの発話行為が話し手と聞き手の両方のFTAとなることもある。例えば、「言い訳」について両者の

立場から考えてみよう。課長が部下の提出したレポートに対して悪い評価を下したとする。そのとき、部下が「部長はこれを良いと評価してくださいましたが。」と言いつけをしたとする。部下（話し手）にとって言いつけをしなければならない状況というのは心理的苦痛を伴うのでネガティブ・フェイスを脅かすFTAとなるし、課長（聞き手）にとっては自分の意見に対して話し手が反論するという事なのでポジティブ・フェイスを脅かすFTAになる。

このように、会話とは両者のFTAになりうる社会的相互行為なのだが、私達は（両者の関係がよほど悪くない限り）できるだけ、お互いのフェイスを脅かさないように様々な丁寧さのストラテジーを使用しながら会話を進めている。このストラテジーはフェイスを脅かす危険度によって決定され、その危険度は次の3つの要因が関係している。それは、①話し手と聞き手の心理的距離、②話し手と聞き手の社会的距離、③その文化におけるFTAの深刻さの違いである。

また、Brown and Levinson は、丁寧さのストラテジー をネガティブ・ポライトネス（聞き手の領域を侵害しないように聞き手と隔たりを作ることによって敬意を表すもの＝ネガティブ・フェイスを脅かすことを避ける）とポジティブ・ポライトネス（聞き手を良いと認めたり、聞き手に親密さを表すもの＝ポジティブ・フェイスを脅かすことを避ける）の2つがあることを主張している。彼らによると、日本語はネガティブ・ポライトネスの文化として分類されているようだが、松本（1988）は、挨拶の定型表現である「どうぞよろしくお願いします」という例を挙げて、初対面の人に対していきなり頼み事をする事は聞き手のネガティブ・フェイスを脅かす行為だと反論する。その上、相手に「お願いする」ということは聞き手にとって名誉なことであり、聞き手を社会的地位が高いと認めることになるので、聞き手のポジティブ・フェイスを守ることになり、むしろポジティブ・ポライトネスの文化と言える。つまり、日本語は相手に敬意を示すことによって聞き手のポジティブ・フェイスを守る丁寧さのストラテジーを使っているというわけである。

そこで、「感謝」と「謝罪」の発話行為について考えてみると、Brown and Levinson はこの2つをネガティブ・ポライトネスとして同じカテゴリーに分類しているが、松本の主張を考慮すると、日本語の場合、聞き手と自分との力関係を常に意識しながら発話するポジティブ・ポライトネスのカテゴリーに入ると言える。つまり、「感謝」とは自分に対して有益だった相手の行為を良いと認めることであり、「謝罪」とは自分の行為が相手に対して不利益を与えてしまったとへりくだることによって、聞き手を自分より社会的地位が高い状態にすることになるからだ。

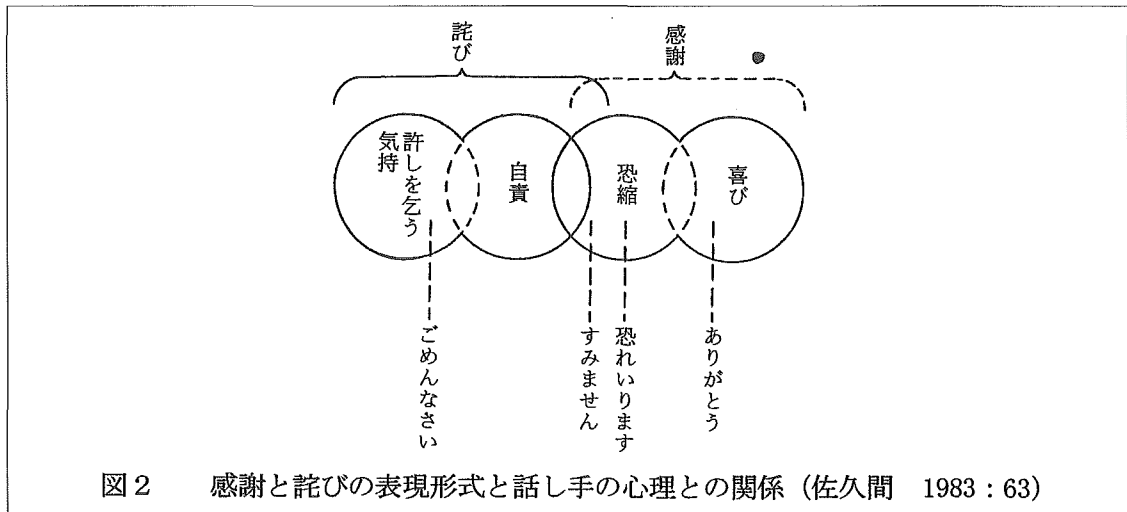
では、日本語教育において「感謝」と「謝罪」はどのような定義付けがされているのだろうか。日本語で「感謝」を表す代表的なことばは「ありがとう」であり、「謝罪」のことばは「ごめんなさい」である。しかし、「感謝」と「謝罪」の両方の意味を持つ「すみません」ということばがある。このような表現は他の言語と比較しても珍しいものなので、日本語学習者にとっても使用するのが難しく、日本語教育では感謝の意味を持つ「すみま

せん」に関して数多く研究されている。それらの先行研究を概観して、日本語での「感謝」と「詫び」<sup>註1)</sup>という発話行為の相違点を挙げてみる。

### 3. 日本語教育における「感謝」と「詫び」の定義付け

#### 3-1. 佐久間 (1983)

佐久間は「感謝」と「詫び」の言語表現の使い分けを話し手の心理状態から説明している。例えば、図2で見ると、誕生日プレゼントをもらったときには「喜び」の気持ちを表す「ありがとう」を使い、お歳暮を頂いたときには「恐縮」の気持ちを表す「恐れ入ります」や「すみません」を使う。つまり、同じ感謝の表現ではあっても、話し手の気持ちの根底に何があるのかで表現形式が変わると言える。



佐久間はまた、お茶を出されたときの感謝の表現として「ありがとうございます」よりも「すみません」の方が、謙虚や優しさが感じられる、という意見については、「もともと前者が自己の「喜び」の表現（自己志向的）であるのに対し、後者が相手（他人）に対する「恐縮の念」の表現（他人志向的）であることを考えれば、ある程度うなずけることである。」と説明している。ところが、同一人物が感謝の気持ちを表すのに、「ありがとう」と「すみません」の両方を使うことがある。この現象について考察している熊取台の主張を見てみよう。

#### 3-2. 熊取台 (1991)

熊取台は感謝の対象となる行動に対して「すみません」と「ありがとう」が併用される現象（熊取台は「併用現象」と名付けている）が、次のような会話（熊取台 1991 : 61より引用）において生じる理由を考察している。

- (1) 女：あの一、ちょっとシャッターを押して頂けませんか。  
 男：いいですよ。  
 女：どうもすみません。ありがとうございました。

「感謝」という発話行為が行われるメカニズムとして、熊取台の解釈によると、まずは、話し手にとって「快適状況が生じ（たと判断す）ることにより、話し手は聞き手に対するある種の『負い』を持つこと」が前提にある。それゆえに、「話し手は円満な人間関係を保持するためにはこの不均衡を修復するための方策を講じなければならない」と考え、「感謝」という発話行為によって再びバランスの良い人間関係を手に入れるのだ。

そして、「すみません」と「ありがとう」の併用現象については、両者の談話機能の違いを「すみません＝不均等修復のための行為、ありがとう＝感謝のやりとりの終結標識」と区別し、感謝のやりとりの構造と併用現象が生じる流れを次のように図式化して説明している。

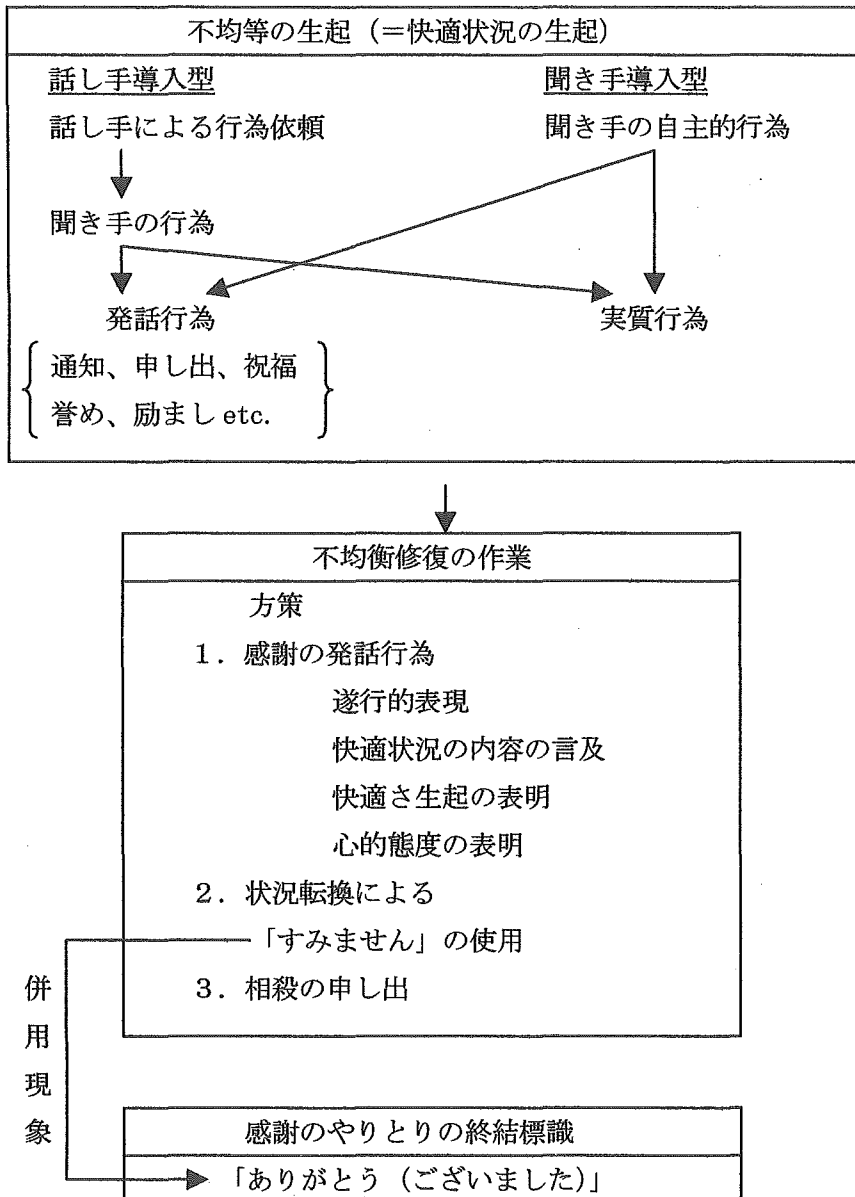


図3 感謝のやりとりの構造と併用現象 (熊取台 1991 : 66)

### 3-3. 三宅 (1993)

しかし、実際にはこのような「すみません」と「ありがとう」の併用より「すみません」か「ありがとう」のどちらか一方で感謝の意味を伝える会話の方が一般的である。つまり、「すみません」の一言に「ありがとう (ごさいました)」の意味を込めていると考えられる。三宅は、indebtedness「借り」の有無が「感謝」と「詫び」の心理を左右すると説いた Coulmas (1981) の論考を考察し、詫び表現がどのような条件において感謝の意味で使われるかを解明しようとしている。

Coulmasによると、「感謝」と「詫び」の言語行動にはいくつかの共通点があり、この両者の感覚が交わる接点を「借り」という概念で説明している。この「借り」とは、誰かに借りがあり、それを返さなければならないという気持ちである。この感覚を佐久間 (1983) は「〈AがBに感謝する〉〈AがBに詫びる〉という場合、話し手であるAが、それぞれ『AがBから利益を受けた』『AがBに不利益を与えた』と認識し、その認識にもとづいて、AがBに対して何らかの働きかけをしようとする気持ちをもつことが前提条件となる。」と説明している。つまり、三宅が考察しているように「感謝と詫びの感覚には接点があり、それは利益や負担という概念でつながっている」と言える。

また、三宅は日本人とイギリス人に対して、感謝と詫びの言語表現について行ったアンケート調査の結果から、「すみません」のような詫び表現がどのような条件において感謝の意味で使われるか、次のように考察している。

詫び表現が選択される決定要素として、

- (1) 目上・目下／親・疎の差
- (2) 相手の負担の軽重、自分の利益の大小、借りの有無があり、(1) は (2) より優先される。

そして、『感謝』と『詫び』のような日常生活に深く結びついた言語行動には、その社会や文化を背景とした考え方や規範が大きく反映している」と結論付けている。

### 4. 調査・検証

では、実際に日常会話において感謝の意味を持つ「すみません」がどのような場面で使われているのか、テレビドラマのシナリオからこのような「すみません」を含む会話を抜き出して検証する。

最初に、次の会話を三宅の述べる「詫び表現が選択される決定要素」(以下、「決定要素」)と照らし合わせながら、なぜ感謝を表すのに「ありがとう」ではなく「すみません」を選択したのか、検討してみよう。次の例文は話し手と聞き手と親密度が高いと思われるものから順番に並べてある。

(2) 仁太郎：トイレのスリッパで、表に出るのは良くないな。

信乃：(気付いて笑う) 私、よくやるんですよ。

仁太郎：…一本いいですか。

（仁太郎に煙草とライターを渡す信乃）

仁太郎：すみません。

（『合い言葉は勇気』2000）

（3）（信乃は雑貨屋を営んでいる。そこへ敵対する会社の職員がパンを買いに来て、忠志の目の前で信乃は追い返してしまう。）

忠志：（驚いて）フナムシの社員には、売ってあげないの？

信乃：当たり前でしょ。敵だもん。（箒を元の場所に掛けて）いつものでいい？

忠志：すみません。

（棚から調理パンを取る信乃）

忠志：（やや得意げに）今、フナムシの社長と会って来たよ。

（『合い言葉は勇気』2000）

（4）（杏子は足が悪く、車椅子を使用している。食堂でテーブルの前まで来るが、椅子が邪魔して車椅子が入れない。）

杏子：あっ、（同僚、見つけて）近藤さん、椅子、引いてもらえませんか。

（近藤、来て引いてあげる）

杏子：すみません。

近藤：いやいや、お安い御用。

（『Beautiful Life』2000）

（5）（家出してきた中学生、尾崎と、尾崎のクラスメートの母親、清子が焼鳥屋で話している）

尾崎：杉並のおばあちゃんところに行くの嫌だって言ったら、おふくろ怒っちゃったんです。

清子：お母さんが親に甘えてくる間、うちにいな。

尾崎：いいんですか。

清子：うちは、あんたがいたら、いろいろ助かるんだから。

尾崎：…。（嬉しそうな顔）

清子：人間はいくつになっても、親に甘えたいときがあるのよ。

お母さんに電話しておいてあげるから。

尾崎：すみません。

清子：うちは、あんたに、このままずっといてほしいくらいなんだよ。

（『職員室』1997）

（6）（五郎は昔住んでいた家に引っ越すために車を貸してくれた清吉にお礼を言いに来た。清吉の妻、正子も加え、酒を飲みながら昔話をしている。）

正子：(つまみを持ってくる) 昨日父さんと見てきたよ、家。

五郎：…スイマセン。

正子：思い出しちゃったよ、あんな時のまんまだもン。

(正子、手酌で酒をくむ)

中略

清吉：あんまし調子に乗って飲むな。

正子：いいじゃない。久し振りにゴロさんに会ってんだもン。

清吉：…。

正子：あのあと三年ももたなかったもンね。おじちゃんもおばちゃんもお骨で戻ってきて。ア、お墓。お盆に草むしりしといたから。

五郎：スミマセン。

(『北の国から』1988)

(7) 村民1：忠志。

(忠志、自転車を止める)

村人1：これ、お袋さんに。(封筒を差し出す)

(忠志、中を覗くと、スタンプが十数枚入っている)

村民1：ニコちゃんストアーのスタンプ。

忠志：わざわざすいません。(再び走り出す、忠志) (『合い言葉は勇気』2000)

(8) 安西：ここに小切手がある。

(小切手をテーブルの上に置く安西。覗き込む悌一郎)

悌一郎：白紙だ。

安西：そう、なーんも書いちょらん。ということは、ここには好きなもんが書けるということです。

悌一郎：…。

安西：お好きな額をどうぞ。

悌一郎：…。(頭を掻く)

(黙って小切手を見つめる悌一郎。安西の弁護士、網干が横からペンを差し出す)

悌一郎：…すみません。

(悌一郎、ペンを受け取ると、おもむろに小切手に書き込む。ペンを返す悌一郎。)

(『合い言葉は勇気』2000)

では、これらの例文を、三宅の決定要素(1)の「目上・目下／親・疎の差」が感謝を意味する「すみません」にどんな影響を与えているか調べるために、相対的力関係や親密度を調査してみる。



	2	3	4	5	6	7	8
年上	話し手	聞き手	?	聞き手	話し手	聞き手	?
相対的力関係	友人	同じ村の人	同僚	同級生の母親	友人の妻	同じ村の人	敵の弁護士
親密度	お互いに好意をもっている	話し手が好意をもっている	普通	普通	普通	普通	親しくない

この表から判断すると、「すみません」の決定要素の優先順位としては

聞き手が年上かどうか < 相対的力関係 < 親密度

であり、親密度は話し手が聞き手をどう意識しているかが重要である。

次に、三宅の決定要素（2）であるの「相手の負担の軽重、自分の利益の大小、借りの有無」について考察する。

	2	3	4	5	6-1	6-2	7	8
相手の負担の軽重	タバコとライターをあげる	パンを取ってあげる	椅子を引いてあげる	家に泊めてあげる	家を見てきてあげた	草むしりをしてあげた	スタンプをあげる	ペンを貸してあげる
自分の利益の大小	タバコとライターをもらう	パンを取ってもらう	椅子を引いてもらう	家に泊めてもらう	家を見てきてもらった	草むしりをしてもらった	スタンプをもらう	ペンを貸してもらう
借りの有無	借りがある	借りがある	借りがある	借りがある	借りがある	借りがある	借りがある	借りがある

この表から分かるように、相手（聞き手）は必ず「何かあげる」か「何かをしてあげる」行為をし、自分（話し手）は「何かもらう」か「何かしてもらう」ことになっている。日本語学習者が難しいと挙げる文法事項のひとつに「やりもらい」があるが、この感謝を意味する「すみません」という発話行為も「やりもらい」の中でも難解な「～してあげる／してもらう／してくれる」の表現と重なる部分がある。つまり、話し手と聞き手の間に実際にものが移動するときだけでなく、話し手が感謝に加えて「相手に申し訳ない」という思いがあれば、「すみません」という発話行動を選択するのだ。佐久間の言葉（図2）を借りると、話し手に「自責の念」がある場合である。しかし、話し手と聞き手の思いは必ずしも一致するとは限らない。例えば、（5）のように杏子が相手の負担を仮に100%と考え「すみません」と言ったところ、聞き手は椅子を引くぐらい大したことではないので80%ぐらいに感じ、「お安い御用」と答えることもある。このように相手が自分のためにしてくれた行動に対し、相手を感じるより相手への借りを大きいものと捉えた場合、つまり話し手の方が恐縮した場合はそれほど問題はないが、その逆の場合、聞き手は話し手の感謝の気持ちが足りないと不愉快になることもある。日本人同士なら相手が自分と親しい関係とか、年齢が近い人だったら「ありがとう」を使い、年上や社会的地位の高い人なら

「すみません」を使うなどTPOによって使い分けできるが、日本語学習者の場合、その判断は難しい。

## 5. 日本語学習者用テキストにおける「すみません」の分類

では、日本語教育の初級クラスでは「すみません」の意味はどのように指導されているのだろうか見てみよう。信州大学留学生センター日本語研修コース（以下、研修コース）で採用している『みんなの日本語Ⅰ』から「すみません」が使われている会話を抜き出してみた。

(9) マリア：すみません。ワイン売り場はどこですか。

店員A： 地下1階でございます。

マリア： どうも。

(第3課 会話より)

(10) A：コンサートのチケットをもらいました。いっしょに行きませんか。

B：いつですか。

A：来週の土曜日です。

B：すみません。来週の土曜日は仕事がありますから。

A：そうですか。残念ですね。

(第9課 練習C-3より)

(11) ミラー：すみません。ユニューヤ・ストアはどこですか。

女の人：ユニューヤ・ストアですか。あそこに白いビルがありますね。

あのビルの中です。

ミラー：そうですか。どうもすみません。

女の人：いいえ。

(第10課 会話より)

おそらく日本語を母国語とする者や、ある程度日本語学習歴がある者ならば、容易に(1)は「呼びかけ」、(2)は「謝罪」、(3)は「感謝」の意味で使われていると理解できるだろう。副教材『みんなの日本語 初級Ⅰ 翻訳・文法解説 英語版』の英語訳でも、これらの「すみません」は(1) Excuse me、(2) I'm sorry、(3) Thank youとはっきり別の意味をもつことばとして扱われている。また、『プログレッシブ和英中辞典』で「すみません」を引くと、「感謝」と「謝罪」の両方で訳文が掲載されている。つまり、日本語の「すみません」が英語では3種類の意味を持つということは、「すみません」の包括する意味範囲がそれだけ広いと言える。

従って、「謝罪」と「感謝」という全く別の言語行動の意味を持つ「すみません」の使用は、初めて日本語を学習する者にとっては戸惑いを覚える現象であろう。試みに、このテキストを使用したことがない中級レベルの日本語学習者に、上記の(1)から(3)の会話の「すみません」の部分だけブランクにして当てはまることばを自由に記入してもらっ

た。結果は(1)では全員「すみません」、(2)では「土曜日はちょっと…」や「行きたいけど…」などいろいろな回答があり、(3)では「ありがとう(ございます)」という回答がほとんどだった。

同様に、日本語を母国語とする日本人(20代～60代の男女)にアンケートを取ったところ、(1)では「すみません」が大多数、(2)では日本語学習者の回答に加えて「せっかくですが／残念ですが…」「申し訳ありませんが／残念ですが 行けません」「申し訳ありません」「ごめんなさい」などバラエティに富んでいた。<sup>註2)</sup> また、筆者の予想では(3)では年齢が高くなるにつれて「すみません」を挙げる者がかなり増えると思っていたのだが、性別・年齢に関係なくほぼ全員の回答が「ありがとう(ございます／ございました)」であった。

この結果から判断する限り、日本人も学習者も同様に(3)では「すみません」を使用しないのに、なぜテキストでは「ありがとう」としなかったのだろうか。佐久間(1983)の例でその理由が窺える。

「数ヶ月前、高速道路の料金所で働く老人達と、たまたま立寄ったドライブインの食堂で相席し雑談したときのこと。深夜勤務の辛さなど日頃の苦勞に話が及んだが、二十歳そこそこの若者がチケットを受け取る時に口にする「ありがとう」があまりうれしくない、ときには嫌な感じさえする、と言うのだ。典型的な感謝の表現である「ありがとう」が不快な表現として映るのは何故か。老人達は異口同音に、何か見下されたような感じがする、と言っていた。」(下線筆者)

これには筆者もびっくりさせられた。筆者も若いときからずっと高速道路だけではなく、スーパーのレジなどでおつりを受け取るときにも、必ず感謝の意味を込めて「ありがとう」と口にしてきたからだ。もちろんこちらとしては相手を見下している気持ちなど全くない。黙ってチケットやおつりを受け取る方が失礼だと思っていた。この「ありがとう」の捉え方の違いは年齢によるものかという点、先程の調査の結果を見ても50・60代の人々が(3)で「ありがとう(ございます)」と答えているので、必ずしもそう言いきれない。金田一(1987)は上記の佐久間の例について次のように分析している。

「先に挙げた高速道路の料金所の場合、初老の係員たちが、車に乗っている若者達に対して持っている感情が問題になりそうだ。係員が若者達に対して、多少でも、生意気だ、とか、こういう連中のために働いているわけじゃないとか、要するに、係員であると言う役割行為から離れた感じ方をしていると、「アリガトウ」という、役割行為としてとらえる考え方、没人間的な役割として見られているあいさつには、反発を感じるかもしれない。「すみません」には、相手の苦勞に対するいたわりがあるのだ。」(下線筆者)

3-1で見た佐久間の分析(図2)から判断しても、若者は単にチケットを受け取った「喜び」を表して「ありがとう」と言っただけなのに、老人達は自分たちが年上だという自負心から若者が自分たちに対して「恐縮の念」がない故の横柄な態度と受け取ったこと

から、不快感が生じたと考えられるだろう。日本人同士でさえ、このような誤解が生じるのだから、日本語学習者にとって相手や場面に応じて「ありがとう」と「すみません」を使い分けるのは至難の業であろう。また、日本人同士の会話と学習者と日本人の会話ではまた違った問題も出てくるかもしれない。そのため、テキストでは無難な「すみません」を採用したと考えられる。

## 7. 結 論

上記の分析をもとに、感謝と謝罪は両方とも丁寧さのストラテジーとして用いられている発話行為であり、話し手に少しでも「自責の念」がある場合、「すみません」が選択され、感謝の気持ちだけの場合、「ありがとう」が選択されると言える。また、日本語では話し手と聞き手の心理的距離や社会的距離、感謝の対象、話し手の心理状態がこれらの言語行動に強く影響しているため、単純に「すみません」と「ありがとう」の使い分けを公式化することは困難である。従って、日本語学習者用テキストでは初対面の人に感謝を表す場合「すみません」を採用しているが、近年では聞き手の年齢に関わらず感謝表現「ありがとう」を言われて不快になる人は多くないことから、より自然な会話を身につけるためにテキストの会話の再検討が必要であると提言する。

## 注

- 1) (2) の例文の場合、自然な会話でなく練習問題として設定されたものなので、(1) と (3) に比べると、回答に時間がかかっていた。従って、回答が統一されなくても止む負えない。
- 2) 日本語教育では「謝罪」ではなく、「詫び」という分類をしている。

## 参考文献

- Brown, Penelope and Stephen C. Levinson, 1987. *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press
- Coulmas, Florian, 1981. *Poison to your soul. Thanks and apologies contrastively viewed*. In F. Coulmas (ed.), *Conversational routine*. The Hague: Mouton. 69-91.
- Goffman, Erving, 1971. *Relations in public: Microstructure of the public order*. Harmondsworth: Penguin.
- 金田一 秀穂 1987 「お礼とお詫びのことば」『言語』第16巻4月号 大修館
- 熊取台 哲夫 1991 「日本語における「感謝」の談話構造と表現配列 - 「すみません」と「ありがとう」の場合 -」『広島大学日本語教育学科紀要』第1号
- 1992 「発話行為対照分析の課題(1) - 日英語の「詫び」の対照を例に -」『広島大学日本語教育学科紀要』第2号
- Matsumoto, Yoshiko. 1988. *Reexamination of the universality of face: Politeness phenomena in Japanese*. *Journal of Pragmatics*. 12:403-426.
- Meier, A. J. 1995. *Passages of politeness*. *Journal of Pragmatics*. 24:381-392.
- 三宅 和子 1993 「感謝の意味で使われる詫び表現の選択メカニズム - Coulmas (1981) の

indebtedness「借り」の概念からの社会言語学的展開ー」

『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第8号

水谷 修 1982 「外国語としてみた日本語の言語行動」『外国語との対照Ⅲ』 講座日本語学12

寺村秀夫編 明治書院

中田 智子 1989 「発話行為としての陳謝と感謝 ー日英比較ー」『日本語教育』68号

日本語教育学会

佐久間 勝彦 1983 「感謝と詫び」『話し言葉の表現』 講座日本語の表現3 水谷修編

筑摩書房

#### 言語資料

鎌田 敏夫、畑 嶺明 1997 『職員室』日本文芸社、

北川江吏子 2000 『Beautiful Life』角川書店

倉本 聡 1988 『北の国から』理論社

野沢 尚 1999 『眠れる森』幻冬社

三谷 幸喜 2000 『合い言葉は勇氣』角川書店

『みんなの日本語Ⅰ』スリーエーネットワーク

『みんなの日本語 初級Ⅰ 翻訳・文法解説 英語版』スリーエーネットワーク

『プログレッシブ和英中辞典』小学館

